

日中国交正常化 50 周年、浙江省静岡県友好提携 40 周年を迎えるにあたって

私が最初に中国を訪問したのは、1992 年の秋でした。友好提携を結ぶ浙江省と 10 周年記念となる年で、私はその代表団の一員として浙江省政府主催の式典に出席するためでした。



何度訪問しても感動する西湖湖畔

静岡駅から新幹線で大阪に行き、伊丹空港から上海虹橋空港に到着しました。もちろん浦東にある空港はできていませんし、虹橋空港も昔の小さな地方空港でした。そこからバスに乗り込んで、浙江省の省都杭州に向かいます。当時は高速道路もなく田舎の凸凹道をバスに揺られました。7 時間かけて到着した杭州市は真っ暗闇にぽつぽつと灯が見える程度で、田舎の省都に見えました。

友好提携 10 周年で、静岡県側から 3 階建てのホテルが寄付されました。

最近、当時の両省県の担当者から思い出話として聞いたところによりますと、静岡県側

は最初に「日本の最高水準のパソコン」を百台寄贈しようと提案しましたが、中国側は「いつまでも残るものが良い」となり、結局ホテル(友好会館)となったそうです。かなり高いプレゼントになったそうですが、現在も使われている施設ですので、すぐ陳腐化したパソコンなどよりもずっと価値があるものだったと、当時の関係者の労苦に感謝しています。





1992年に静岡県から浙江省に寄贈された花家山荘(杭州市)

美しい西湖はその後何十回と訪問しましたが、近くにある龍井茶の龍井村など、浙江省そして杭州市にはいつ行っても心が安らぐ素敵な場所がたくさんあります。

この時は帰りに香港に寄りました。ビクトリアピークにそびえ立つ迎賓館「スカイハイ」で待っていたのは、静岡県熱海市が発祥のヤオハンの和田一夫会長でした。

ヤオハンが上海や北京にデパートを建設しようとしていました。迎賓館の本社にあるM&Aの大会議場を見た後で、二人でこんな話をした。「和田さん！中国に進出すること不安ではありませんか？」と聴きました。彼はにこやかな表情で「西原さん！戦争に負けた日本が豊かになっていて、戦争で勝った中国は貧しい。日本は戦争で中国に迷惑をかけたから、経済で応援して豊かになってほしい。中国が、よこせ！と行ってきたら全部さしだしますよ！」と真顔で答えました。

その後1995年に、ヤオハンが上海浦東にデパートを開業した時に、案内をいただいて見学に行きました。すごいお客さんだったにもかかわらず、誰も紙袋を持っていませんでした。買っていない、見ているだけのお客さんに「大丈夫だろうか！」と心配をしました。

当時、静岡県はシンガポールに事務所があり、次のアジア事務所設置を香港に考えていました。私は「ヤオハンが進出する経済の中心地、上海が適切だ」と知事に要望し実現しましたが、残念なことに事務所設置3ヵ月後にヤオハンは破綻しました。

その後十数回に渡り、経済や教育や環境といった様々なテーマで中国を訪問しました。今でも続く中国との深い交流の原点は、2002年浙江省との友好提携20周年記念訪問にもありました。その年の10月、静岡県訪問団は、2便に分かれて名古屋空港から浙江省の省都杭州にできたばかりの蕭山空港に降り立ちました。800人を超える静岡県からの訪問団を浙江省政府は大変歓迎してくれました。

杭州劇院で行われた記念式典には、11月から省書記に就任する習金平(現最高指導者)省庁代理が挨拶をし、「もっと広い分野での協力を両省の間で行くことに期待をもっている。青少年の交流を更に強力に増やして、中日の友好の後継ぎを養成していくことが大切」と結びました。

静岡県の石川知事や議長の挨拶の後に、いわゆる「井戸を掘った人」として、85歳でもかくしゃくとした静岡県日中友好協議会の井上光一理事長が力を込めた挨拶をしました。要約すると以下の内容でした。

「交流が始まった古いきさつを知っている人が減ってきた！22年前の1980年、山本敬三郎知事と浙江省にやってきた。温州みかんとお茶の故郷と言う単純な動機だったが、来て驚いた。美しい西湖や産業など気候風土など静岡県とも似ている。早々ここしかないと思った。改革開放が始まったところで、相互理解がなかなかうまくいかなかった。忍耐でやった。気も使った。当時の沈省長さんが『晩婚でやろう』と言った。私は『どうせなら早いほうが良い』と主張した。その時、省長さんが『静岡県はお荷物を持つことになって大変だよ』と言ったが、『それでもかまわない提携は永久です』と言って進めた。現にいまや中国で冠たる浙江省になった。世界でも冠たる浙江省になった。更なる友好提携の促進をしたい」と、静岡県側からの熱いメッセージを送りました。

大会の挨拶から伺えた姿勢は、静岡県はどのような支援や交流をしたかという過去の話題に対して、浙江省はこれからの発展と友好促進に触れていました。浙江省にとって静岡は有利かどうか、友達として経済産業文化教育で交流して省のためになるか、その視点が大きいと感じました。

私は帰りの飛行機の中で、熱い挨拶をした井上日中友好協会理事長から、「西原さん、私の後を継いで若いあなた方が、青少年教育交流と経済交流で中国浙江省との交流

を続けてください。」とタスキを受け取りました。それが、県議会議員や市長時代を通じて一貫して日中関係の地方レベルでの、教育と経済(MIJBC)構築を目指してきた理由です。



浙江省寧波と静岡県(静岡市・焼津市・藤枝市・島田市・牧之原市・吉田町・川根本町)の経済交流

日中国交正常化 30 周年のこの年を前後して、日本と中国との新しい関係が始まろうとしていました。1990 年代の中国が製造業の国としたならば、大成長の勢いは中国国内の科学技術と大衆消費を大きく押し上げ、日本を追い抜き追い越す勢いを持っていました。

2001 年に実現した WTO への加盟によって、日本と中国の貿易摩擦が話題となり、2002 年には、小泉首相(当時)が訪中し「日中経済パートナーシップ協議」の場が設置されたように、経済の交流は活発化し、2007 年に日本の最大の貿易相手国は米国に代わって中国になり、2010 年には中国の GDP は日本のそれを上回り、中国は世界第二の経済大国となりました。

一方、日中留学生人材育成支援事業が始まり、シニア海外ボランティア派遣や日中青少年友好交流など、青少年を中心とした「未来志向の交流促進」が図られるようにな

ったのもこの時期でした。

特に、2008年の北京オリンピック、2010年の上海万博など中国が紹介される機会が多くなり訪中観光客の増加を期待しましたが、政治的な対立もあり、経済の交流が進む一方で人的交流は進みませんでした。逆に、大成長する中国からは訪日旅行者が増え続けています。歓迎されることですが、相互理解のためには、日本からの訪中旅行者の増加を図ることも急務です。

外交面での安定した日中関係を取り戻す有効策は見いだせていませんが、民間・企業レベル、地方政府レベルでの交流は、積極的に進めていくべきだと考えます。

来年は国交正常化 50 周年の記念の年です。

コロナが治まり、日中両国の各分野での交流が正常に戻り、両国関係の明るい未来になることを期待しています。次回は、静岡県内での交流の最新情報をお届けします。

文:西原茂樹, MIJBC 理事長